

静岡 県 磐 田 郡 豊 田 町

広野北遺跡発掘調査概報

1983年3月

京 都

平 安 博 物 館

I. はじめに

宅地化の波に洗われる磐田原台地上では、昨今頻繁に小規模な事前調査が実施されている。本調査もそうした動向と軌を一にするものである。しかし従来の例に比較するとはるかに規模が大きく、先土器時代集落のほぼ全掘を果たす等の多大な成果を上げることができた。こうした調査結果の重要性から、できるだけ早急に概要を公表する必要が感じられた。遺跡からは先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物・遺構が発見されたが、整理行程の都合上本文での記載は先土器時代に限った。また、整理が十分に進んでいないために個別具体的な記述が乏しく、俯瞰的な観察による予見が随所に見られることをお断りしておく。

なお、広野北遺跡は、かつて『磐田原先土器時代遺跡地名表』の中で広野2号遺跡として登録された地点と同じである。約200m南方にある広野1号遺跡が細石器の出土で知られるのに対し、発掘調査の結果、広野2号遺跡ではナイフ形石器が中心となることが判明した。このため、両者の違いをより明確にする目的で、ここでは広野北遺跡と呼称した。

II. 調査経過

豊田町は、天竜川を挟んで50万都市浜松市と接しており、全国有数の人口急増地帯である。数年前までは茶畑の緑に包まれていた磐田原台地上にも新興住宅が目につくようになり、児童・生徒の増加に伴う学校建設が希求されるようになった。昭和56年には、これを受けて豊田町高見丘に新設校建設の決定が下った。

現地は、かつて圃場整備事業のために重機による造成を広範に受けており、埋蔵文化財の存在そのものに疑問のある地域であった。しかし昭和53年には、先土器時代の遺跡としてすでに発表されており、少なくとも現状を調査する必要はあった。

この目的で、第一次発掘調査が昭和56年9月28・29日の2日間実施され、遺跡が未攪乱の状態で保存されていることが確認された。第二次発掘調査は昭和57年2月2日から26日まで実施され、遺跡の性格、広がり、堆積状態などに関する知見が得られた。ここに至って当地が古墳・弥生・縄文時代と、先土器時代の文化層を持つ複合遺跡であることが判明し、ようやく発掘調査の緊急性が知られる所となった。豊田町は静岡県と調査方法の検討を行なう中で、急拠、財団法人古代学協会・平安博物館に発掘調査の協力依頼が為された。古代学協会では、かつて昭和52年に、広野北遺跡と同じ磐田原台地上に位置する寺谷遺跡の発掘調査に加わった経緯もあり、この依頼を受諾することになった。その結果、静岡県が発掘調査の主体となるが、特に先土器時代については古代学協会が協力助言し、発掘後の整理分析を実施するという事になった。なお、発掘調査担当者として静岡県側は堀田良雄・栗野克己・山田元広・飯塚晴夫が、平安博物館からは山下秀樹・鈴木忠司がその任に当たった。

こうして、昭和57年5月11日より重機による表土剥ぎが始まり、ようやく第三次にして本調査の開始をみるに至ったのである。

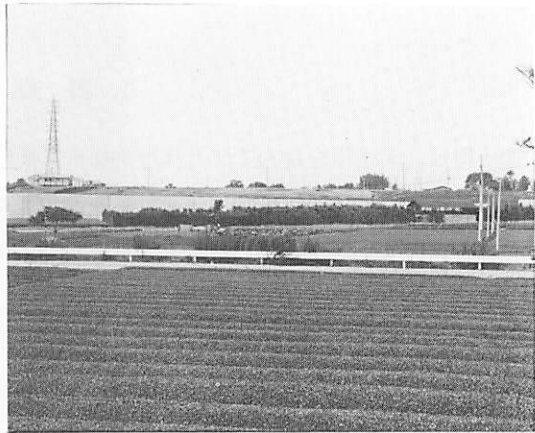
学校の建設・開校との関係から、本調査は約13,000㎡をわずか7ヶ月で、すなわち昭和57年12月末日までに掘り上げる必要に迫られていた。そこで学校建設の工程を考慮して、調査区を三区に分けて発掘を実施することになった。第一区は調査区中央の約6,000㎡で、校舎の建設が予定されており、8月末日までの3ヶ月間で完掘しなければならなかった。第二区は調査区南側の約4,000㎡で、体育館の建設のために10月末日までに、第三区は北側の約3,000㎡で、幼稚園他の付属施設が予定され、これを12月末日までに発掘することとした。

第一区の東半は、圃場整備とか茶の作付によって遺物包含層の上半が乱されており、表土剥ぎ後のジョレンによる清掃で、先土器時代の遺構分布の概要が把握された、一方、西半部には縄文土器片の混じる黒色土が残されていた。これらを掘り下げ、第IV層の先土器時代の遺構全景が撮影できたのは、ようやく8月8日である。写真撮影と同時に遺構群の取上げと下層の発掘を開始した。

この時点で調査の遅れが明白になり、県・町・建設業者・発掘担当者協議の上、9月15日を目標に第一区の発掘を完結させることになった。下層からも予想以上の遺構・遺物の発見があったが無事9月13日をもって第一区の調査を終了した。

9月に入るとともに、一部をすでに第二区の調査に充てていたが、9月14日から全面調査に移った。第二区は、東半部が天地返しを受け遺物量も少なく、9月16日で終了した。西半部も、第IV層以浅の削平が進んでおり、また遺跡の中心部からははずれているようで遺物量は少なかった。このため第二区は当初予定より早く、10月22日に全てを終了した。

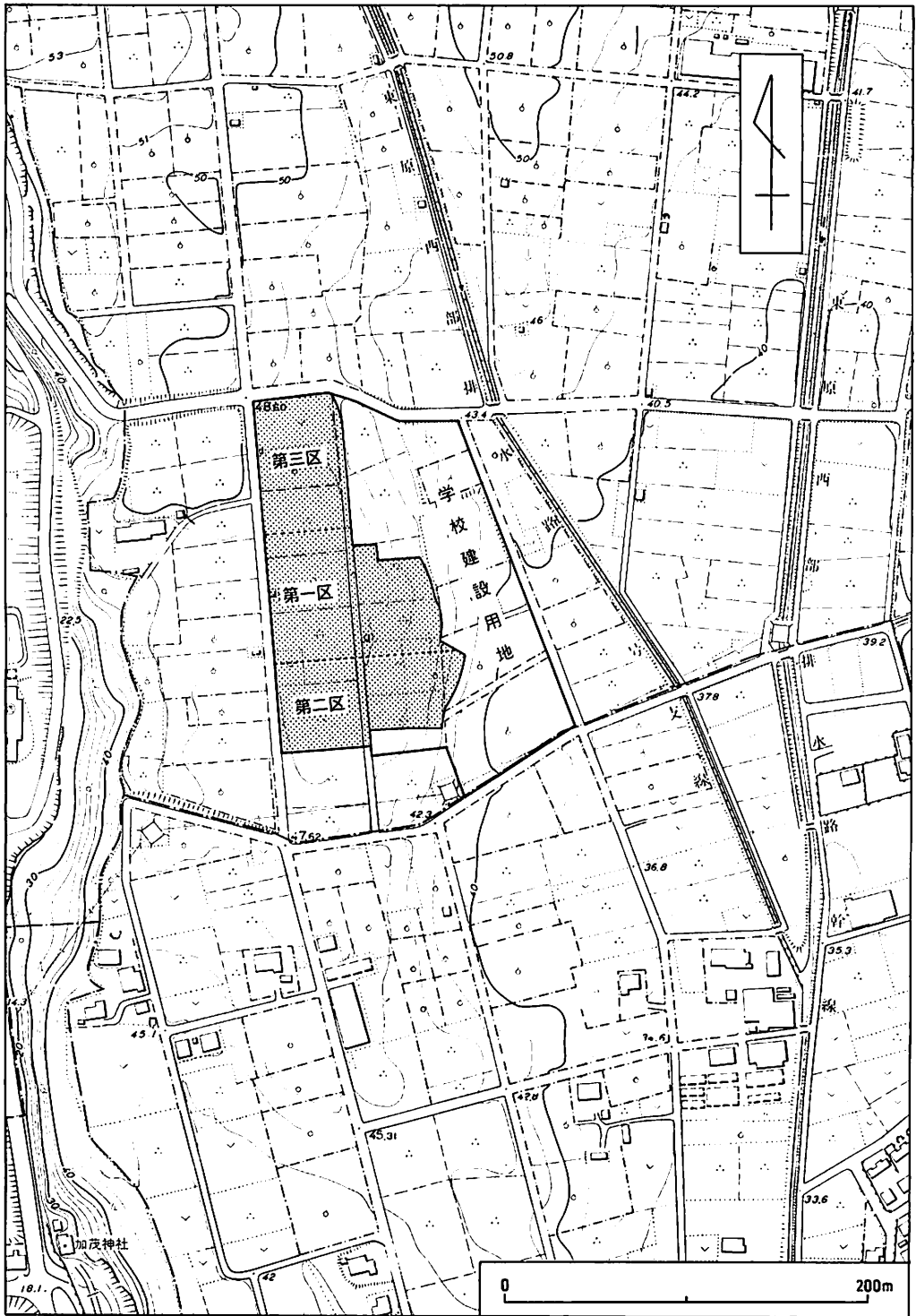
第三区では、南半に方形周溝墓群や縄文時代の住居址があったため、全域を同時に掘り下げることが止め、北半の発掘を先行させた。北半は、今回の調査区域でも最も出土遺物量が多く、多忙を極めた。しかし移動土量はそれほど多いものではなく、11月末日までにはほぼ完了した。一方、南半は遺物量はそれほど多くないのに対し土量は多かった。これに1ヶ月を要し、11月23日に全発掘を終了した。



第1図 遺跡遠望(東から)



第2図 調査区近景(南から)



第3図 調査区(網点)と遺跡周辺の地形

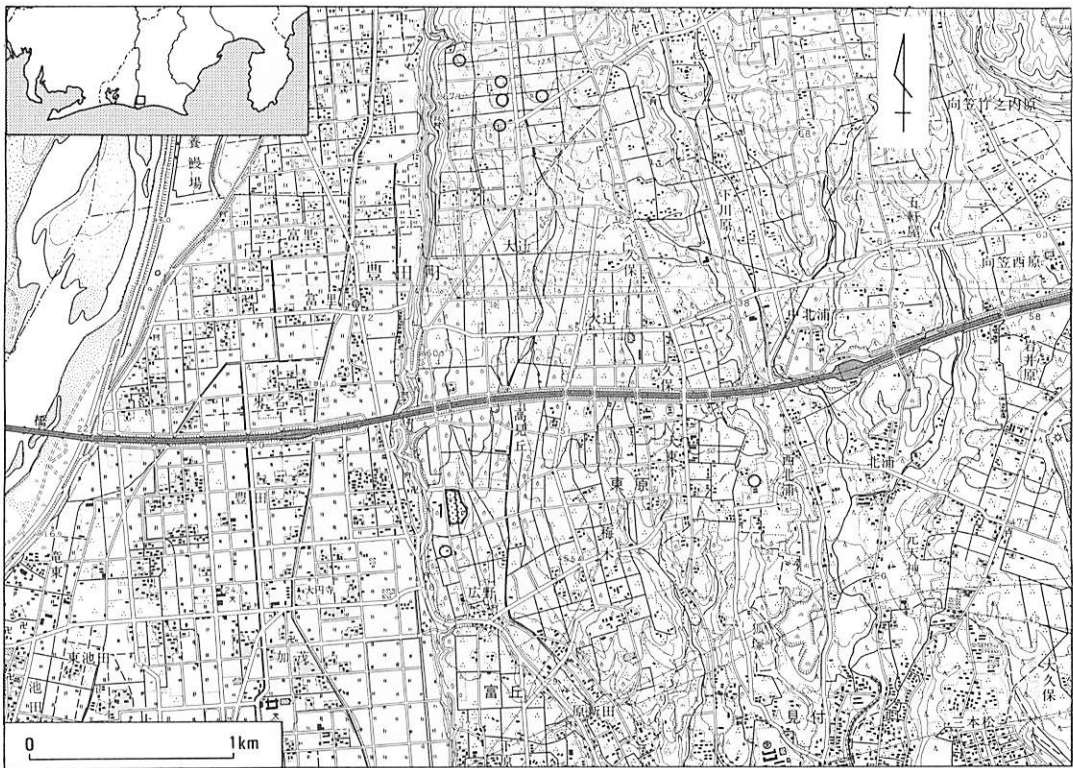
Ⅲ. 遺 跡 の 立 地

広野北遺跡は、静岡県磐田郡豊田町大字高見丘に所在する。遺跡は、天竜川左岸に発達する扇状地性中位段丘である、磐田原台地上に位置する。台地の西縁を限る崖線までは、約150mの距離である。標高は、47～50mを計る。天竜川の現河床面との比高は、約30mである。

磐田原台地は、南北約11km、東西約4kmの広さを持っている。北端では天竜川との比高が100mにも達するが、南に向かって徐々に高度を減じ、国鉄磐田駅の南方で沖積面下に没する。

台地上は比高1～3m程の浅谷が網目状に発達している。先土器時代遺跡の多くはこれに面して立地する。これに対し、広野北遺跡は深さ10m、巾300m程の大きな開折谷に面している。さらに詳細に見るならば、東にこの大きな谷を望むが、西には南方に向かって比高1～2mの浅谷が開いている。この浅谷の谷頭部は、調査区内の0E区辺りである。遺跡は、この深浅二つの谷に挟まれた南北に延びる緩やかな尾根上に広がるが、主体は東面に存している。

また広野北遺跡は、既に知られる磐田原台地の先土器遺跡群でも最も南に位置するものの一つである。遺跡分布の中心は台地でも西北部にあり、南部では本遺跡の南約200mの広野1号遺跡と約2kmに京見塚遺跡が知られるのみである。



第4図 広野北遺跡(1)と周辺の先土器時代遺跡(○)

IV. 調査方法と発掘区

我々は、1977年の寺谷遺跡の発掘調査以来、集落構造と景観の復原を主眼とした分析研究を実施して来た。その過程で常に問題となっていたのは、通常の調査方法では確認できないと考えられる住居・火処の位置を、どのようにすれば検出できるか。少しでもこの問題に接近することであった。

その一環として、寺谷遺物では「土壌の受熱分析」を実施した。さらに野沢遺跡では「微細遺物」の検討と「蔽石類の分布論」を展開した。寺谷ではより直接的な証拠を、野沢ではより間接的な証拠を得ようとしたものである。

広野北遺跡は、こうした視点からの発掘調査地点としては絶好であった。一つには、調査面積が広いために、先土器時代集落の全容を把握できる可能性があったこと。二つには、調査域がほぼ一つの尾根を覆っていることから、集落の単位性が保証される可能性が高い。三つには、非火山灰降下地帯としては比較的堆積に恵まれていること。四つには、先土器時代遺跡の集中する磐田原台地に位置するために、将来的に遺跡間の関係を検討できる可能性が強いこと、である。

以上の点を吟味した上で、実際の調査の進行に当っては、以下の諸点に特に意を払った。

①発掘の進行に合わせて、できる限り遺物の性格を掌握し、同一生活面のより広範な追跡・検出に努める。

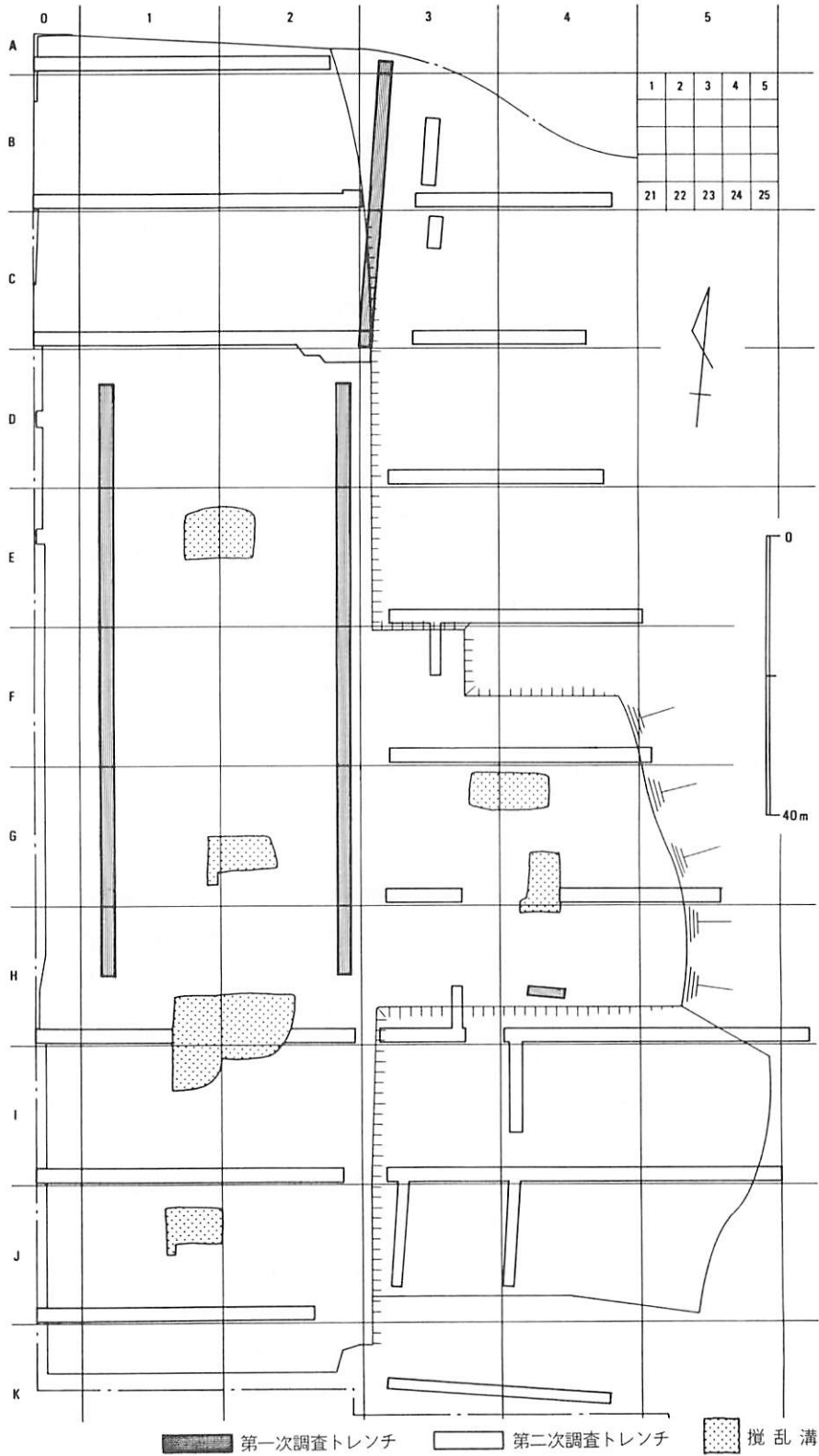
②同一生活面を一単位としてあつかう。特に礫群・配石・土坑といった遺構群の全体分布については、記録保存という意味からも、視覚的な実在感としても、一枚の全景記録写真として残せるように努める。

③火処の検出に努める。このため、2500㎡程の範囲を1m四方の区画に割り、各区画から50×50×3cmの土砂を採取し、これを水洗選別する。この方法では自然礫とされる直径1～2cmの小円礫をも採取する。人為的に動かされることの少ないと思われるこれら小円礫の被熱を調べることによって、本来あるべき火処を割り出せる可能性がある。

④碎片の分布に特に注意することによって、工作作業場の位置を求める。③と方法は同じである。

以上、①・②によって集落の全体像を、③・④によってより詳細な位置関係を描き出すための示唆が得られればと願うものである。

発掘区画は、調査範囲が広大であるため、大きな区画を20m四方、小さな区画を4m四方とした。基準線を、区画整理で造られた調査区中央を南北に貫く農道の中央線に合わせた。この線は、学校建設のための測量用の基準ともなっている。これから東西に20m毎に、また南北は任意に20m毎に区画を割り付けた。大区画は、西から東へ順に0から番号を付し、北から南へA～Kとし、1A区とか2B区といった呼び方をした。また大区画内を4m四方の小区画に細分し、北西隅から北東隅へ1から5、1の南に6が来るようにし、南東隅が25で終わるように番号を付した。小区画は、このため1A15とか2B21という呼称になった。



第5図 調査区配置関係図

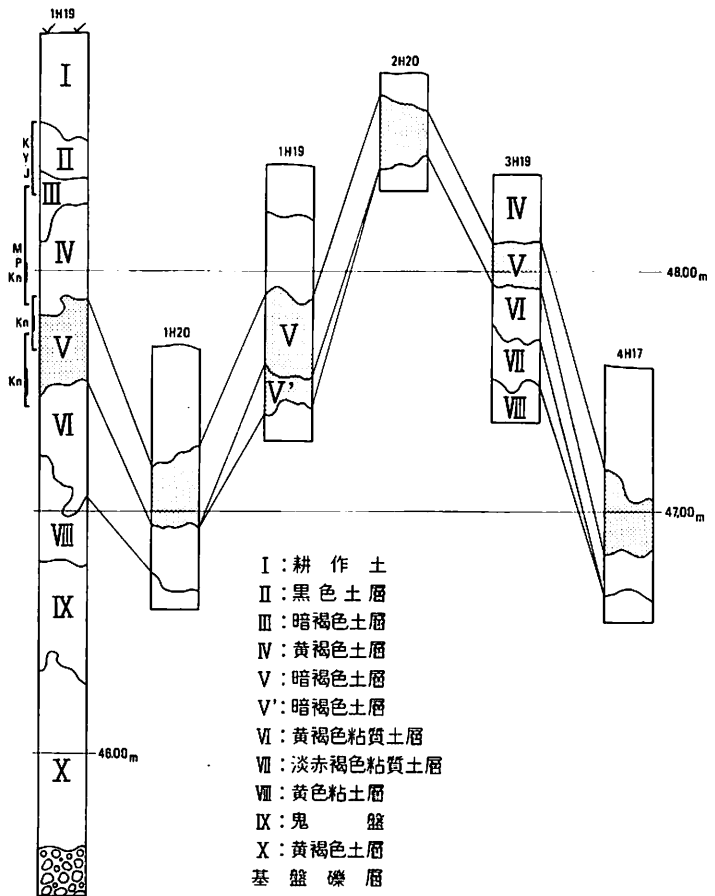
V. 層 位

広野北遺跡を乗せる磐田原台地の土層は比較的良好に調査されている。本遺跡で認められる層準も基本的にそれらに準拠するが、黒色帯は第II黒色帯に該当すると思われる1層が確認されたに留まる。

段丘礫層までの土層は1H19区でも3.5mを計り、最も厚い中央部では4.5mにも達すると推察される。以下表層から順に説明する。

I層は耕作土である。灰白色味を帯びる。II層は黒色土層であるが、中に ϕ 0.5~1mm程の白色微粒を多量に含む。III層は漸移層で、暗褐色を呈する。根による汚染が進んでいるようで、 ϕ 0.5~1cm程の黒色シルトブロックを多く含む。白色微粒もかなり含んでいる。IV層はよくしまった黄褐色土層である。上半部に白色微粒がやや多いようである。 ϕ 数mmの小礫を少量含む。V層は暗褐色土で、磐田原台地の他の地域の第II黒色帯に該当すると思われる。白色微粒と ϕ 1cm以下の小礫を少量含む。V'層はやはり暗褐色土であるが、やや白色味を帯びている。小礫・白色微粒の量がV層よりやや増えるようである。滞水性もV層よりやや高い。本層はV層下部に発達しており、調査区西半の浅谷に向かう緩斜面側

にのみ分布する。VI層は粘性の強い黄褐色土層である。本層以深は水の影響が強かったようで、 ϕ 2cm位までの小礫を多く含むようになる。また下半部では ϕ 2~5mm程のマンガン粒が多く見られる。VII層は粘性の強い、淡赤褐色土層である。 ϕ 0.5~1cm位の小礫を多量に含む。本層はV'層と逆に、調査区東半の深い谷に向かう緩斜面にのみ発達する。VIII層は強粘性の黄色土層である。部分的にオレンジ色に近くなる。小礫・マンガン粒をVI層よりもさらに多く含む。



第6図 土層柱状図

IX層は鬼盤と通称される層で、灰白色の粘土を主体とする層である。小礫・マンガンを多く含む。X層はIX層よりさらに礫を多く含む黄褐色土層である。粘土分は減少する。XI層は基盤礫層である。

A Tの層準は定かでない。寺谷遺跡以後、京見塚遺跡の概報では、一時、Ⅲ層(広野IV層)に該当すると考えられる層準に比定されたが、これは後に撤回されている。また、瀬川裕一郎氏も別に新井房夫氏に依頼した分析結果から京見塚の第IV層(広野第V層)上部以浅には明確なA Tが検出されていない旨を発表している。

自然堆積層のうち、文化遺物の含まれるのはⅡ～Ⅵ層である。Ⅱ・Ⅲ層からは、古墳・弥生・縄文時代の遺物・遺構が発見される。Ⅲ層下半から先土器時代の遺物が散見されるようになるがⅣ層中には少なくとも3つの文化階梯が、Ⅳ～Ⅵ層にかけては少なくとも3つのナイフ形石器文化段階の生活面が考えられる。Ⅳ層中からは、細石器文化と尖頭器文化・ナイフ形石器文化に属する遺物が発見されており、いずれもⅣ層下半部が主たる包含層と考えられる。ナイフ形石器文化に属する他の二つの生活面は、Ⅴ層上半部と、Ⅴ・Ⅵ層境界面に求めることができる。

VI. 遺 構 と 遺 物

先土器時代の遺構と遺物は、少くとも5つの段階に分けることができる。新しい方から順に、細石器段階・尖頭器段階・3つのナイフ形石器段階である。3つのナイフ形石器段階については現在それらを区分して説明することは難しい。ここでは、ナイフ形石器段階を自然堆積に従って2つに大別して説明するに止める。なお遺物総数は、石器約8,000点、礫約18,000点である。

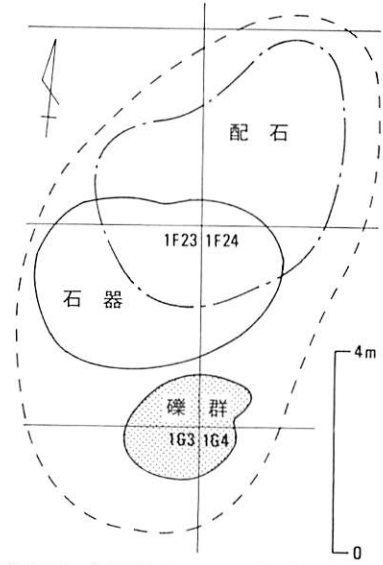
a) 細 石 器 群

細石器群は、調査区西斜面の1つのブロックを中心にまとまって分布する。ブロックは配石・礫群と石器で構成される。配石はブロック北半に多く見られ、長径が30cmを上回るような巨大な礫もある。礫群はブロック南半に分布する。通例、礫群はナイフ形石器段階の後半に普遍的なもので、細石器文化段階ではほとんど伴なわないと考えられている。しかし本例は、径2m位の中に100点余の礫が分布しており、分布密度こそやや低いが、性状においてはナイフ形石器文化段階のものと何等変わるものではないように思われる。また、本ブロック周辺ではナイフ形石器の出土も稀で、偶然ナイフ形石器に伴なう礫群と細石器が同一地点に残されたとは考えにくい状況にある。石器群はブロック全体に分布するが、配石と礫群に挟まれた中央部にやや多いようである。

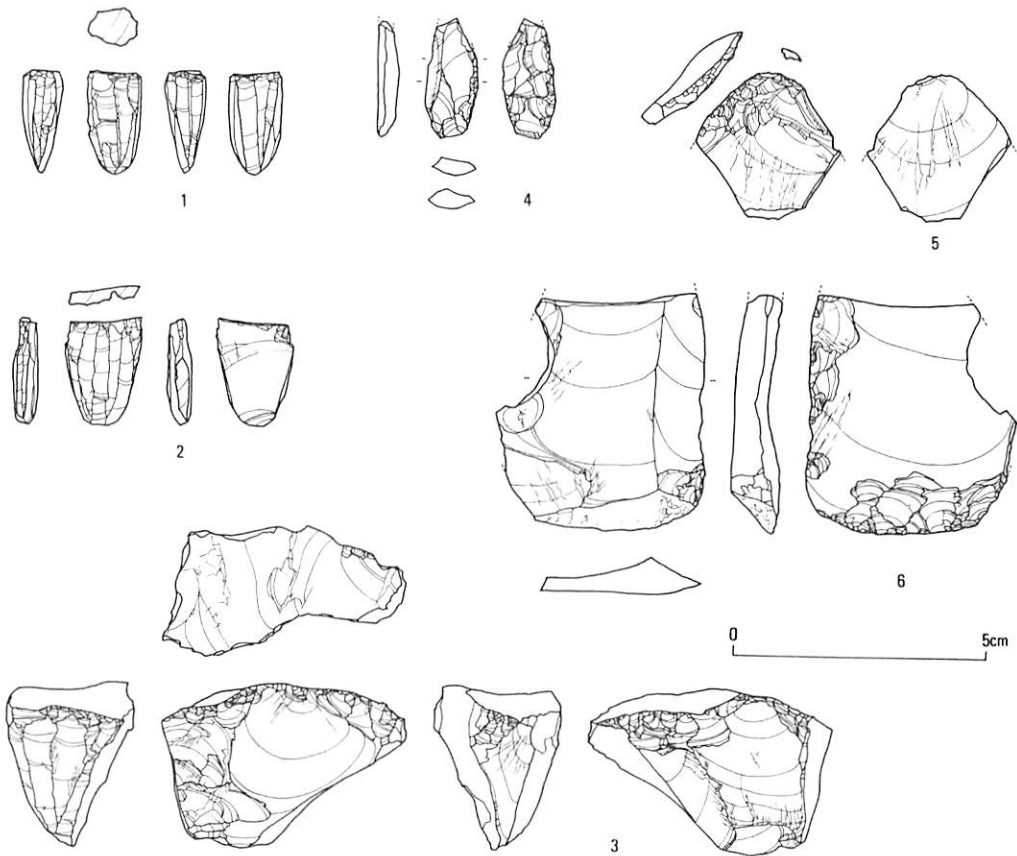
石器には、細石刃、尖頭器、各種のスクレイパー、細石刃核がある。細石刃は60点余あり、ほとんどが2cm以下で、折れたものと完形のもの相半ばする。稀に刃部の一部に微細な調整加工を施す例がある。尖頭器は、そもそも細石刃に伴なうものか否か問題ではあるが、一応同一ブロック中からの出土であり、組成に含めて考える。加工は周辺部あるいは片面に限られるものが多く、両面全体の例はない、スクレイパーは刃部の形状によって2種に分けられる。一方はナイフ



第7図 配石と礫群



第8図 細石器ブロック遺物分布概念図



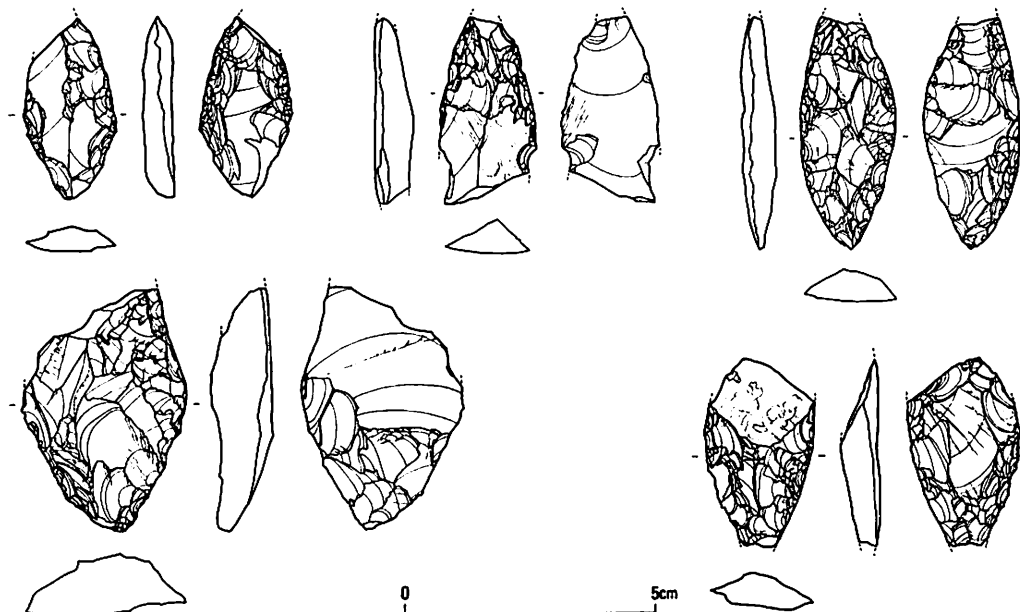
第9図 細石器群の石器(1~3: 細石核, 4: 尖頭器, 5・6: スクレイパー)

形石器の刃つぶし加工よりはゆるいが比較的急斜な刃部を持つ一群で、他方は平坦な剥離によって刃部が作り出されるものである。この二つの調整技術は本ブロック出土の尖頭器にも複合して認められ、スクレイパー類との弁別を難かしくしている。細石刃核は1点の例外を除き、円錐形や扁平な形状のものが中心となる。いずれも打面角は約90°、打面調整を施さず、頭部調整は入念という共通した特徴を持っている。東海地方に普遍的な属性を備えた細石刃核である。なお、これらの石器は全て頁岩である。

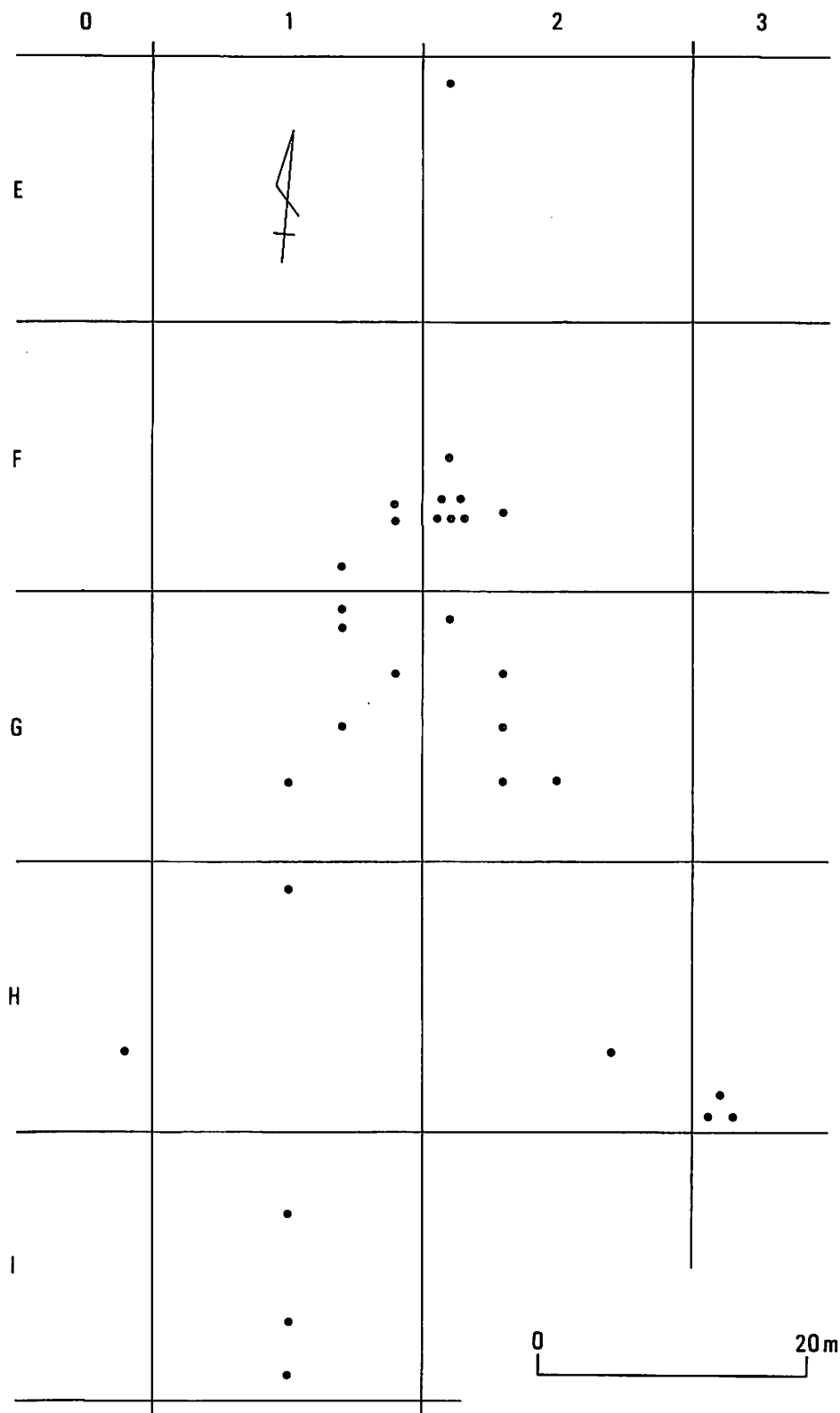
b) 尖頭器群

尖頭器群は、調査区西斜面のE～I列まで、約50×100mにわたって分布している。1 F20・2 F16区を中心にしたブロックが1つ認められる。また、3 H21区のナイフ形石器群に伴う土坑覆土中からも2点の尖頭器片が出土している。他は単独で出土している。ブロックは、細石器ブロックの東に隣接している。構成は配石と石器群のみで、礫群は伴っていない。配石は数個の礫から成っており、ブロックの東南部を占めている。石器は北西部に広がっている。石器組成は判然としないが、尖頭器に若干のスクレイパーが伴うようである。

尖頭器は30点ほど発見されており、両面加工品と片面あるいは半両面加工品が相半ばする。大きさは、幅2cm、厚さ6～8mm程のものが多い。破損品が多いため、長さを復原することは難しいが、3.5～8.5cmと幅がありそうである。編年的にはナイフ形石器群に、一部重複しながら後続する尖頭器群として扱えられる範疇に入るものと考えられる。ここでは、ナイフ形石器群と平面的な分布域を異にすることから、時期的に異なるものとして処理した。スクレイパーは細石器に伴出したものと酷似する。急斜な剥離で刃部を作り出したものと、平坦剥離を施した例が認められる。石材は、1点の黒曜石製尖頭器を除いて、全て頁岩である。



第10図 尖頭器群の石器



第11图 尖頭器分布概念图

C) IV層のナイフ形石器群

本層準で確認された遺構は、礫群・配石・土坑である。礫群は、大小合わせて80基ほど認められる。いずれも焼けて赤化したと思われる河原石とその破片で構成されている。構成礫数には幅があり、小規模なものは20~30個、大規模なものは300個程である。大きさにも幅があり、狭い例では径50cm, 広い例では径3 m位にわたって拳大以下の礫が群集している。

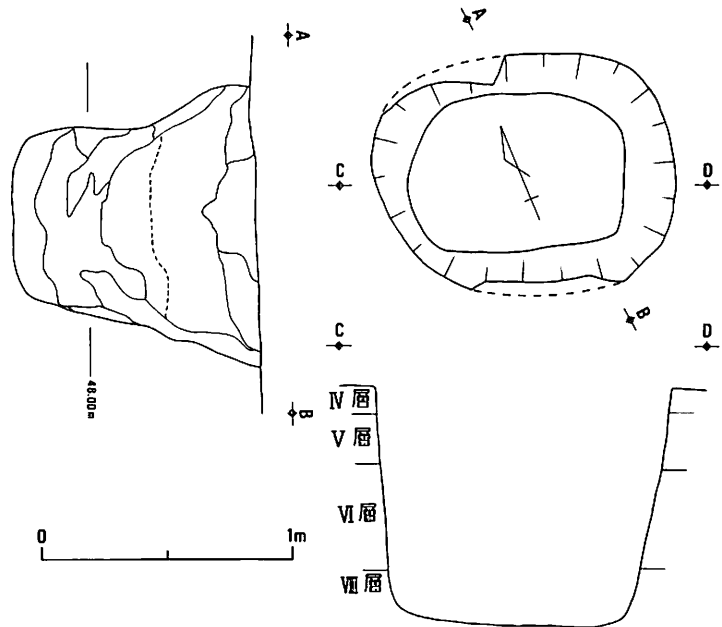
配石は礫群を構成するのよりはやや大型の赤化していない礫から成っている。単独あるいは数個が集まって配石群となる。少なくとも50基以上検出されている。

土坑は、合計18基発見されている。二つの例外を除き、他は長径・短径・深さがおよそ100×90×100cmを測り、極めて画一的である。平面形は、隋円形から隅丸方形を呈する。覆土中からは、ナイフ形石器・尖頭器・敲石・赤化礫などが出土しているが、流れ込みのような例と底面に接して発見される例がある。何も遺物を含まない土坑もある。

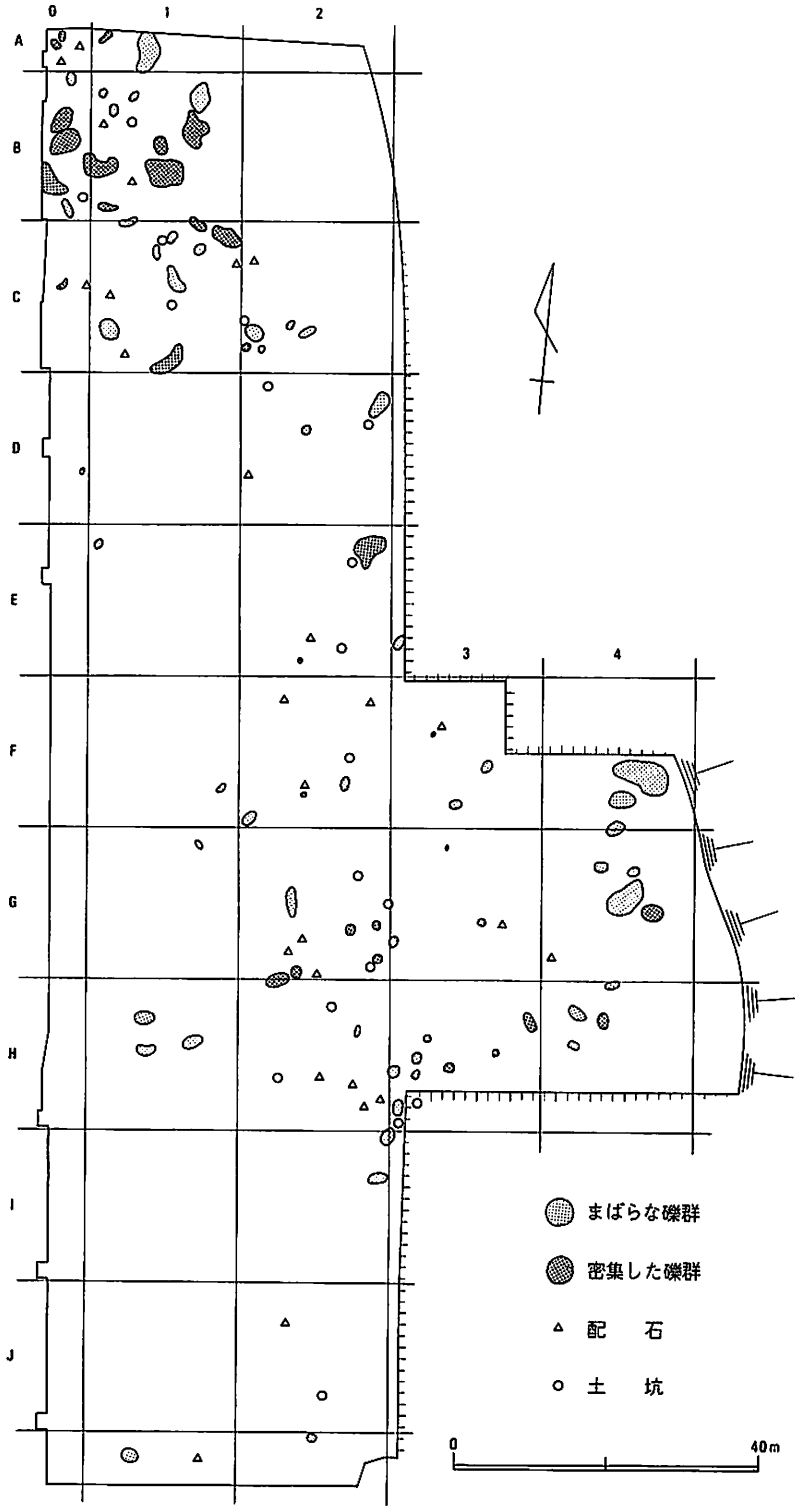
これらの遺構群は、およそ80×200 mの範囲に広がっており、南北に伸びる台地の尾根筋から東緩斜面に分布の中心を持っている。地形を詳しく観察すると、全体としては東へ張り出しているが、調査区北方では東から浅い谷が入り、尾根筋もこれによって若干西に押し曲げられている。遺構群の分布は、この地勢を忠実にトレースするかのような様相を呈する。すなわち、礫群は尾根筋にも若干分布するが、多くは台地を縁取るように地形面の肩の部分に連なっている。また、礫群の性状を見ると、外縁部に位置するものは散漫に広範囲に散っており、台地中央寄りのものは小範囲に凝集する傾向にある。礫群に縁取られた内側には広い空間が広がるが、そこには点々と配石と石器ブロックが分布する。石器ブロックについては、位置を示せる状態にないため今回は省略してある。土坑は、ま

さに尾根筋にそってほぼ10m間隔で連なっている。この地勢に対する位置関係が、調査区北方で地形区分が不明瞭になるとともに混沌となり、礫群・配石・土坑が一体となって分布するようになる。

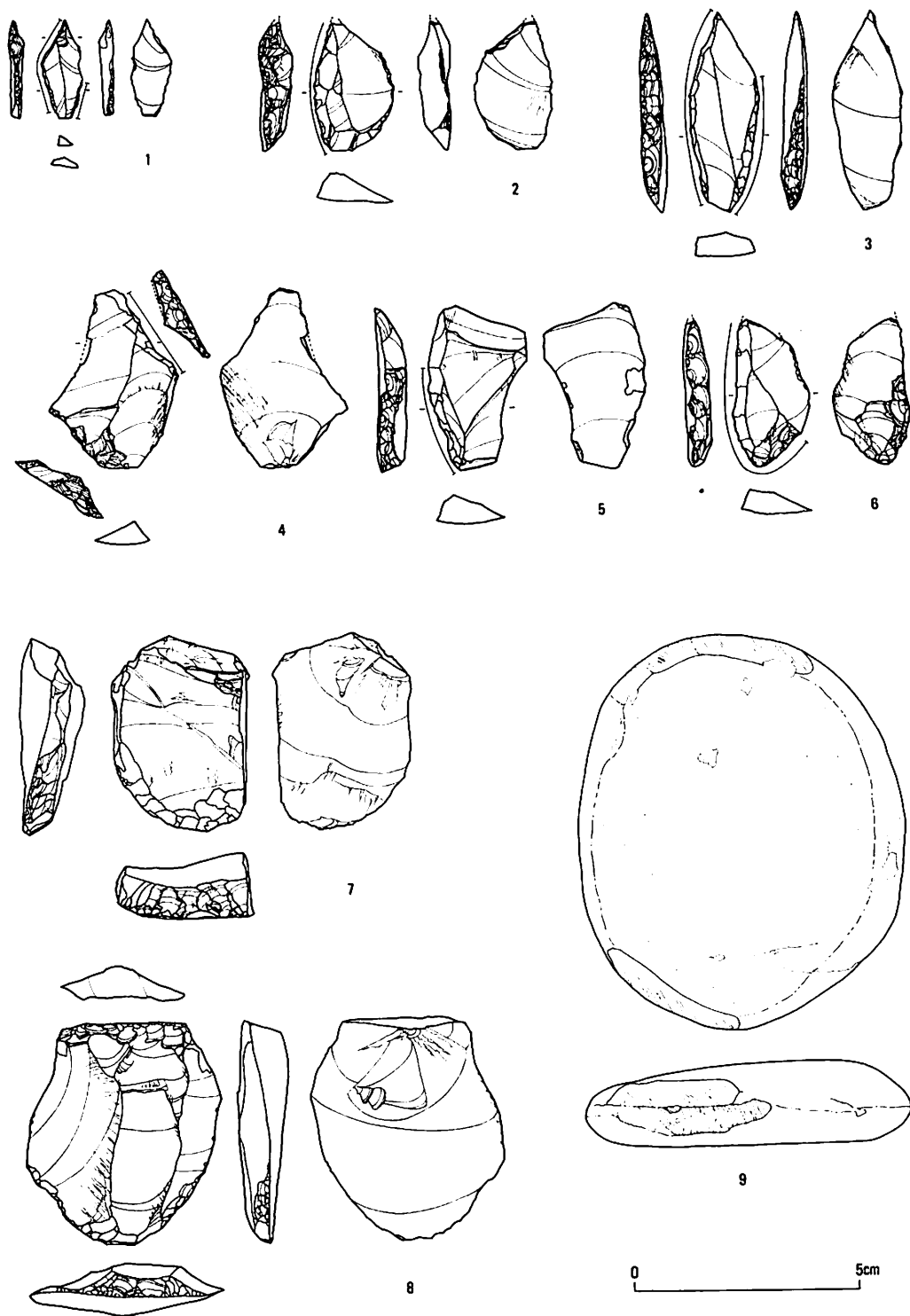
石器には、ナイフ形石器・スクレイパー・局部磨製礫・UF・石核・剥片・碎片が含まれる。ナイフ形石器は60点以上発見されているが、所謂二側縁加工例・一側縁加工例・基部加工例・部分加工例が



第12図 土坑実測図



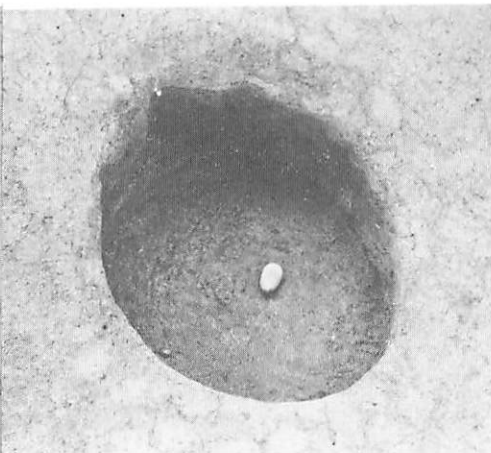
第13図 IV層のナイフ形石器群に伴う遺構分布概念図



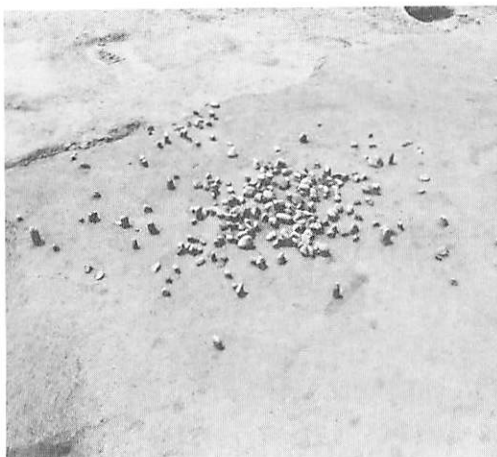
第14図 IV層のナイフ形石器群の石器(1~6:ナイフ形石器, 7・8:スクレイパー, 9:局部磨製礫)



土坑確認面



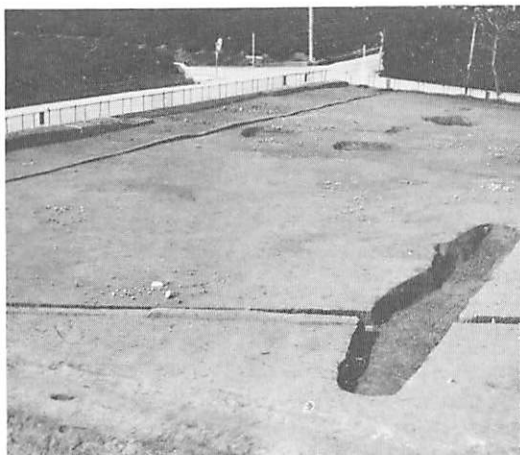
完掘された土坑



礫の密集した礫群



小規模な礫群



第三区IV層遺構分布状態(南から)



配石

第15図 IV 層の遺構

認められる。二側縁加工のものが圧倒的で、おそらく80%以上を占めていると思われる。大きさには最小1.7~最大6.5cmと幅があるが、3~4cmのものが標準である。3点の黒曜石、2点のチャートを除くと他は全て頁岩製である。スクレイパーは10点余り発見されている。円形に近い厚手の素材を利用したものが多く、しっかりとした刃部を備えている。局部磨製礫には砂岩製のものが多い。剥片剥離技術は、やや巾広の縦長剥片を目的としたもののようである。

d) V層のナイフ形石器群

遺構としては、礫群と配石が発見されている。礫群が50余、単独の石を1基とするならば100以上の配石が発見されている。

礫群はIV層のものに較べて大規模なものが増加する。最大例では、構成礫数が1400点を越えるものもある。またV層では、バラバラに割れた礫で構成される礫群と、完形の比較的大型礫で構成される礫群との差が顕著になる。

配石は、数が著しく増加することに加えて配石広場的な様相を見せる所もできてくる。また、配石には立った状態を保って出土する例も多い。

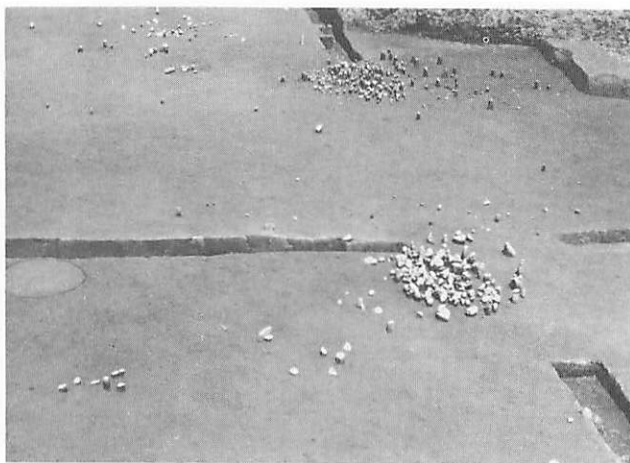
これら礫群と配石には、IV層に認められた様な配置上の偏りは見られない。礫群に近く位置する例もあれば、遠く隔れている場合も多い。ただ、発掘時の所見としては、バラバラに割れた礫から成る礫群と完形礫の礫群さらには配石が集まって一つの単位となっているようであった。その単位が、間隔をおいて点々と連なるようである。これに加えて、別個に配石広場的な空間が位置している。

石器ブロックについてはIV層同様、詳細はわかっていない。

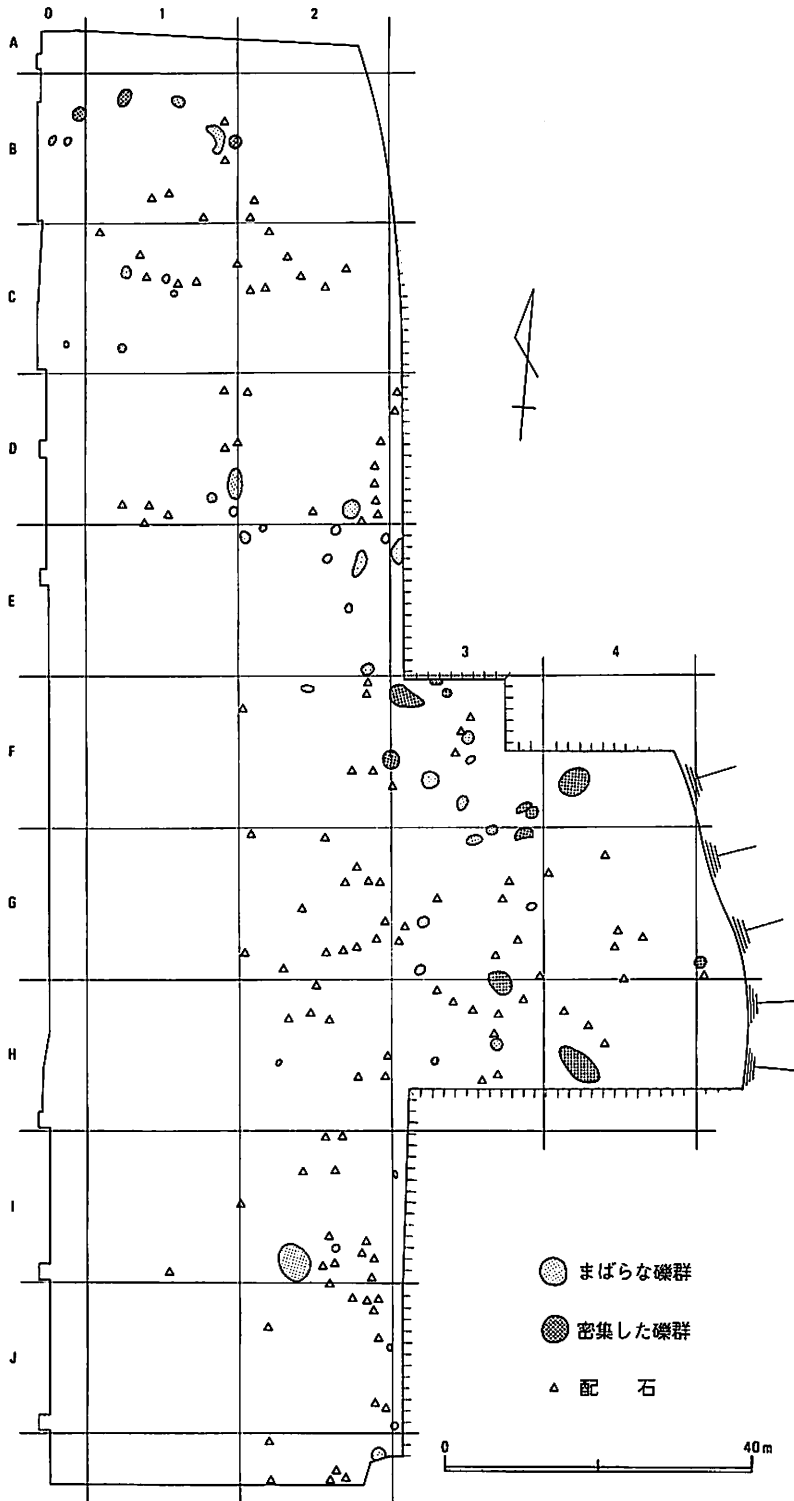
石器にはナイフ形石器、スクレイパー、彫器、局部磨製礫、敲石、UF、剥片、碎片、石核がある。ナイフ形石器は30点程発見されている。形態組成はIV層と変わらないが、二側縁加工例が減り、換わって一側縁加工例が増加する。この傾向と関係するのか、瀬戸内系と思しきものも1点含まれている。チャート・黒曜石・玉髄質のもの各1点を除くと、他は頁岩製である。

スクレイパーは、IV層ほど安定して伴ってはいない。形態的にも、それほど典型的な例はなく、刃部加工も弱々しい。

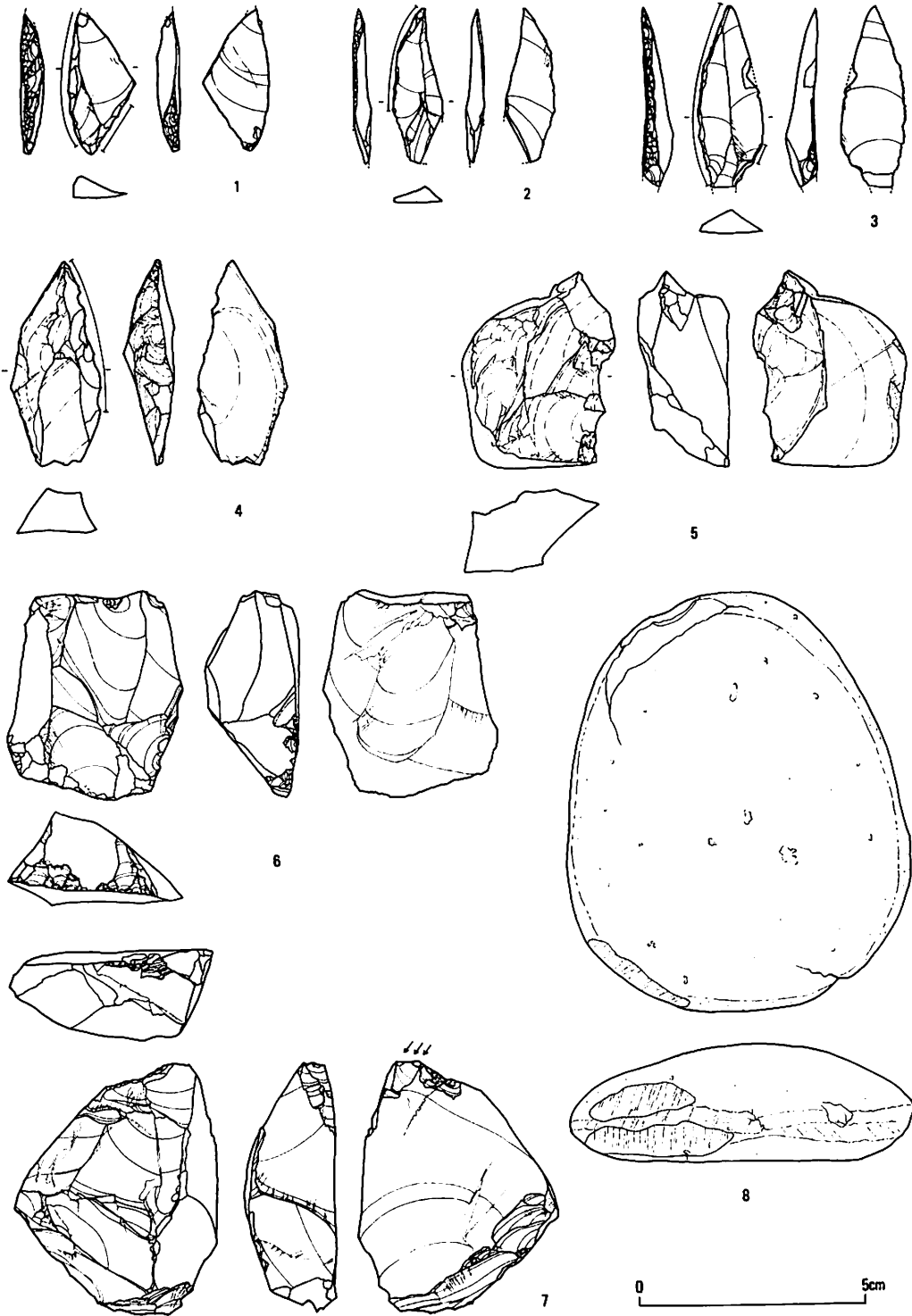
彫器には、折れ面を打面として彫刀面打撃を施した例と、調整打面を作り出している例がある。いずれも数回の彫刀面打撃が施され、頑丈な刃が付けられている。素材は方形に



第16図 V層の礫群と配石



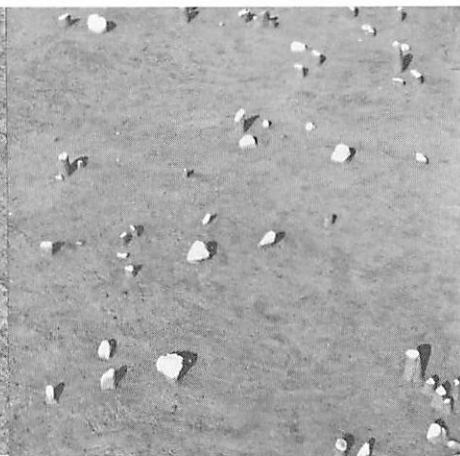
第17図 V層の遺構分布概念図



第18図 V 層の石器 (1~4: ナイフ形石器, 5: 石核, 6: スクレイパー, 7: 彫器, 8: 局部磨製礫)



配石



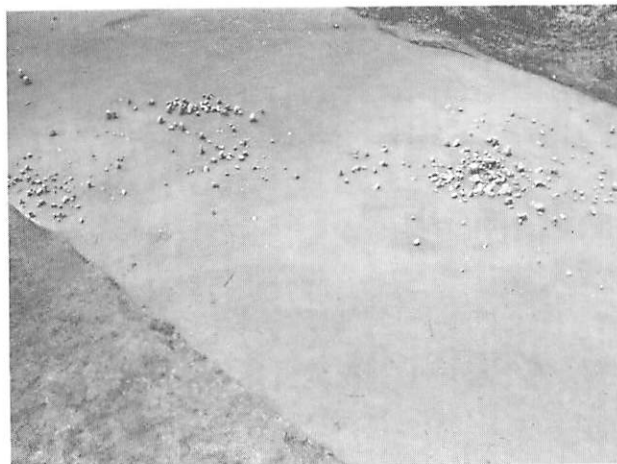
配石群



完形礫の多い礫群

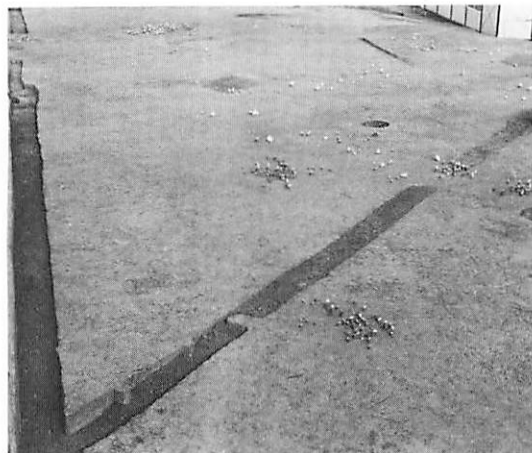


破損礫の多い礫群



礫群の集中部

第19図 V 層の遺構



第20図 第三区V層遺構分布状態(南から)

近い、厚手大形の剥片である。

局部磨製礫は、一点の流紋岩製を除くと、
他はIV層と同じく砂岩製である。

石核には、瀬戸内系と思われるものが一点
含まれている。翼状剥片を伴出しなため判
然としないが、ナイフ形石器とともに検討を
要する。剥片剥離技術の大勢は、第IV層と変
わらない。

Ⅶ. ま と め

今回の発掘の最大の成果は、細石器群・尖頭器群・ナイフ形石器群の集落跡のほぼ全容を把握でき得るだけの調査ができたということであろう。全国的に見ても、地形・遺物分布から判断して、本発掘ほど広範囲の全面調査を実施した例は少ないように思う。結果として、一見したところでは無駄と思えるような空間を広く発掘したような印象もあろうが、遺物の空白地帯を十分に調査したことによって、集落の限界性や遺構分布の意味をより確かなものとして掌握することができた。すなわち真の意味で集落の全域発掘に近い調査を実施できたと言える。

特に細石器群・尖頭器群については、集落跡を完掘することができた。こうした例は、もちろん東海地方では初めての事であり、今後、該期の集落構造はもちろん、地域性の理解を深めるためにも資する所大である。

ナイフ形石器群では、攪乱が広く入っているだけに、前述の例ほど完全に集落跡を掘り尽してはいない。しかし完璧とは行かないまでも、ほぼ集落構造の全容を把握し得ると考えている。今後の本格的な分析検討を経なければならぬが、我々は広野北の様な約80×200mもの大遺跡が全く同時に住い・残されたものとは考えていない。むしろ、一定地域集団が廻り返し居住する過程で累積的に残されたのが大遺跡であろうとの予測を持っている。この点については、V層のナイフ形石器群の所で触れた礫群・配石等を含む単位が、いかにも示唆的である。これが、即座に一単位集団によって同時に残されたものに対応するか否かは別として、今後の集落研究においては、集落の最小構成単位の抽出が一つの重要な課題となるであろう。こうした視点に立つならば、広野北のような広大な遺跡の場合、その何割かがたとえ欠落していようとも、大勢としての集落構造・景観の復元は可能であろうと考えられるのである。

ナイフ形石器群に関するもう一つの大きな成果は、重複する複数の文化層を確認できたということである。静岡県中部以西の東海地方で、こうしたまとまった資料が出土したのは、磐田市京

見塚遺跡と本遺跡のみであろう。従って型式学的な編年研究の一助となるのは当然であるが、さらに重要な点は、石器群の時間的変遷と集落構造の変遷を対応させながら考察できる事である。より包括的な意味での、文化の変遷に対する理解を深めることができると考える。具体例で言うと、V層からIV層へと、石器群にも若干の変化が認められるが、文化要素としての遺構にまで意を払ってみるならば、礫群・配石にも少なからぬ変化がある上に、何よりもIV層には土坑が伴うという大きな変化が認められる。土坑の出現は、その構造物としての重要性を感ずる時、ひとり新しい種類の遺構が加わったと言うには止まらないように思われる。背景として、社会、経済的基盤の変容にまで思いを馳せる必要がある。

以上、大局的に見た成果と今後の展望について記して来たが、次にもう少し個別の具体的な留意すべき点について触れておこう。

第一はブロックサンプルの採取である。今回の発掘では、採取区域を礫群・配石・石器ブロックを含めた約2,500㎡と定めた。サンプル中の微細遺物や細礫の受熱の有無などの検討から、ブロックとその周囲の遺物分布上の空白地帯を再評価する。野沢遺跡でも様々な分析を経て、遺物群と住居・火処の位置にまで言及したが、今回はこのような問題にさらに確固たる傍証を加えんことを意図したものである。

土坑群もその性格がわからないだけに処置について十分な意を払った。覆土は全て採取し、計1000袋を上回る量を1mmのフルイで水洗し、微細遺物の検出に努めた。さらに壁際及び床面直上の数袋については、博物館に持ち帰り、炭化物が破損しないように風乾・選別の後に水洗する予定である。得られた炭化物のうち、大型のものは樹種同定を実施する。また、覆土を柱状にサンプリングしており、これについては花粉分布を依頼している。

これらに加えて、自然科学的な分析もいくつか行なっている。花粉分析・鉱物分析・¹⁴C年代測定・サーモルミネッセンス法による年代測定・礫の受熱分析がそれである。鉱物分析は、磐田原台地のAT層準を確かめる目的がある。¹⁴C年代測定は、特に第V層に含まれる礫群に多量の炭化物が伴うことから有効と考えられる。サーモルミネッセンス法は、礫群の礫に応用を試みている。焼けた礫は全国どこでも入手し得るものなので、これから年代測定ができるようになれば、普遍的な測定年代値を得るという意味では¹⁴C法より有利であろう。礫の受熱分析は、「赤化礫は焼けている」という大前提を自然科学的に証明しようとするものである。礫群の分析に限らず、サーモルミネッセンス法も含めて、受熱を前提にして成立している分析法は数多い。それにもかかわらず、「焼けている」事の証明は十分には行なわれていない。改めてこのような基本的な問題を解決するとともに、肉眼観察のみによらない「焼け礫」の大量分析の可能な判別法を模索したいと考えている。

以上、広野北遺跡の発掘調査は我々がかつて経験したことのないほどの広さと遺物量を提供してくれた。それだけに情報量も多く、旧来の懸案解明に向けて整理に期する所も大である。限られた時間ではあるが、充実した本報告の刊行のために全霊を傾ける所存である。本報告では、今回掲載できなかった縄文・弥生・古墳時代の記載も十分行なう予定である。なお、先土器時代の

遺物は平安博物館において保管・整理を行なっている。出土遺物・遺構に興味を持たれる方は、大いに利用されたい。



第21図 分析用土壌採取状態



第22図 礫群のレプリカ取り

あ と が き

広野北遺跡の発掘は、時間的にも予算的にも制約のある中で、多くの人々の献身的な努力でようやく完遂することができた。特に人手不足とはいえ動員された新設校へ通う児童の父兄の方々も含め、一時は真夏の炎天下、100人を越す作業員の方々が休日を返上して営々と作業に従事して下さいました。また、現地指導をいただいた諸先生、学業の合間を縫って現場作業に携わっていただいた学生諸氏には何かと御苦労や御不自由をおかけした。しかし、ようやくにして成った発掘成果は、学史上に欠くべからざる史料たりうるものと担当者一同自負している。今ここに、調査の遂行にあたって寄せられた御厚情に対し御芳名を掲げ、衷心よりの感謝の意を表したい。

参加者（順不同・敬称略）

柴崎健太郎・高井良夫・新田浩三(明治大学)、伊藤雅文・宇佐美明子・大下明・熊谷俊美・千喜良淳・西岡誠司・山口卓也・山田隆一・山元建(関西大学)、酒井彰子・柳沢順・山下淑子(京都女子大学)、島立桂・竹広文明(広島大学)、田中聡・原真一(同志社大学)、岩元雅毅(立命館大学)、猪俣甲二郎・綿貫俊一(別府大学)、五十嵐彰・出居博(慶応義塾大学)、佐野康夫(南山大学)、小川正人・角宜剛(中央大学)、Amani Juma Kasinya(京都大学)、本多俊朗(国学院大学)、保坂康夫(山梨県教育委員会)、小林ゆり・山崎克己(磐田市教育委員会)、沢元保夫(広島県埋蔵文化

財センター), 黒坪一樹(京都府埋蔵文化財調査研究センター), 松井政信(福井県埋蔵文化財センター), 工藤敏久(東京都埋蔵文化財センター), 相川幹子・松谷純一(多聞寺前遺跡調査会), 宮坂直子(更殖市教育委員会), 石田美代子, 市野浩世, 田村欧盟, 徳永裕・南博史・山尾典子(平安博物館)

指導・助言・協力者(順不同・敬称略)

市川米太(奈良教育大学), 加藤芳朗(静岡大学), 山田治(京都産業大学), 向坂鋼二(浜松市立博物館), 平野和男(磐田市郷土館), 瀬川裕一郎(沼津市歴史民俗資料館), 辻誠一郎(大阪市立大学), 森進一(磐田南高等学校), 土屋光久(磐田北高等学校), 山村宏(遠江考古学研究会), 鈴木幸朗, 鈴木久雄, 潮見浩(広島大学), 戸沢充則(明治大学), 鈴木公雄(慶応義塾大学), 鶴丸俊明(日本女子大学), 阿部祥人(東京都埋蔵文化財センター), 岡本東三(文化庁)。

本報告の作成に当って, 石器の実測・トレースは山尾典子女史にお願いした。挿図の作成は, 山尾・山下が協同で行なった。

静岡県磐田郡豊田町
広野北遺跡発掘調査概報

発行日 昭和58年3月31日
著者 平安博物館考古学第一研究室 山下秀樹
京都市中京区三条通高倉
発行者 平安博物館
京都市中京区三条通高倉
製作 ビクトリー社
京都市中京区油小路通錦上ル

